『容疑者Xの献身』―セクシュアリティの言説という罠

難波江　和英

序

東野圭吾には「ガリレオシリーズ」と題された作品群がある。現時点では、『探偵ガリレオ』(1998)、『予知夢』(2000)、『容疑者Xの献身』(2005)、『聖女の救済』(2008)、『ガリレオの苦悩』(2008)、『真夏の方程式』(2011)の六作品である。これらは、短編グループの『探偵ガリレオ』、『予知夢』、『ガリレオの苦悩』と長編グループの『容疑者Xの献身』、『聖女の救済』、『真夏の方程式』に大別できる。『容疑者Xの献身』は、他の作品と同じく、帝都大学の物理学者・湯川学を探偵役としながら、初の長編として、先行する短編集を踏まえ、後続する長編へ架橋する起点になっている。たとえば、長編第二作の『聖女の救済』は「聖女の救済」をモチーフにしている点で、そして最新長編作の『真夏の方程式』は「身代わり」をトリックにしている点で、この作品から創作法を継承している。しかし『容疑者Xの献身』は、それでもなお、同シリーズの他のどれとも異なり、他のどれよりも傑出した作品になっていると思われる。本稿の目標は、その理由を解明すると同時に、解明へのアプローチの方法そのものを更新することにある。

『容疑者Xの献身』へのアプローチの方法として、これまでもっとも注目されてきたのは、いわゆる「本格推理小説論争」だろう。2005年11月28日、作家の二階堂黎人がサイトで、この作品は広義のミステリーとしては優れているが、本格推理小説ではないと主張したのが発端である[1]。それ以降も、論争は

『ミステリマガジン』誌（2006年3月号—12月号）に場所を移して継続される。しかし、その論点は「本格推理小説」の定義や歴史、推理の手掛かりや証拠の妥当性、あるいはトリックの技術論であり、『容疑者Xの献身』を文学作品として読むという視座に欠けている。

たとえば、波多野健は「『容疑者Xの献身』は本格か？」（『ミステリマガジン』2006年4月号）で、主人公の石神哲哉について、「石神は、死んでいるのに生き続けるために、無理矢理、靖子に恋慕しているという幻想を大切にはぐくんで、生きている理由に仕立ててゾンビ生活を続けていたとわたしは思うのである。だから、『純愛』とか、石神が靖子を本当に愛したとかいうことはなかったはずである」（144）と推察している。あるいはまた、大森滋樹は同号で、『容疑者Xの献身』を「ひとを殺して女を口説く話」や「裏返された『電車男』」（101）として読めると指摘している。しかし、これらの評者の場合、たとえば「恋慕」、「純愛」、「本当に愛した」、「女を口説く」といった例からもわかるように、男女関係を論じるときに異性愛の用語を張りつけるのに終始して、日常の言語を批評の言語に変換しえていない。これから提示する論点はまさに、ここにも見られるとおり、性的存在としての人間とセクシュアリティの言説の癒着関係にある。

このことを踏まえれば、『容疑者Xの献身』がガリレオシリーズの他のどれとも異なり、他のどれよりも傑出した作品になりえている理由が見えてくる。それは、簡単に言えば、この作品が性的存在としての人間を描いているばかりでなく、人間がどのように性的存在としての自己を形成し、それを社会の現実として生きているかを語っているからである。その観点から特記すべきは、いつも自信満々で、天才扱いされている湯川が、この作品においてだけ自分自身を「ふつうの人間」（321）と認めていることである。そこから、これまで見過ごされてきた論点が二つ派生してくる。一つは、人並み外れた論理力や推理力をもつ湯川さえ凡人に変えてしまう事件の非日常性の意味であり、もう一つは、その意味を日常として生きる「容疑者X」の非凡な人間存在の可能性で

ある。これらの論点を解く鍵は、見つかって当然であるからこそ、それがそれとして見えにくくなってしまうところに置かれている。タイトルの中、「献身」の二文字である。

しかし、この「献身」の意味を辞書的に定義して、『容疑者Xの献身』という作品の卓越性を説明することは不可能である。それは、その意味が難解であるからではなく、そもそも「献身」という言葉が作品内で一度も使われないからである。言い換えれば、セクシュアリティの用語を生む源として想定されながら、その用語に隠されて、意味を確定されることのない言葉が、作品全体に秘められたメッセージを赤裸々に、しかしそれ自体の不在を弔うかのように表紙を飾っている。それこそ、『容疑者Xの献身』というタイトルの「献身」の意味である。

それでは、「容疑者X」こと石神哲哉は、その意味をどのように生きて、常人たちの理解の及ばない犯行を企てながら、彼らの想像を超えた人間存在の可能性を開こうとしたのだろう。もし「献身」という言葉をそのまま定義できないとすれば、残されているのは、他の登場人物たちがセクシュアリティの用語でつくる異性愛のかたちを分析して、それではない何かとして石神の「献身」を浮かび上がらせるというアプローチの方法である。喩えて言えば、石神以外の「ふつうの人間」たちが異性愛の言説を介して生きる男女関係を一つの輪としてイメージし、そのかたちを支える中空の穴として、石神の「献身」を構造的に掬い取ることである。

I
「ふつうの人間」の異性愛のかたち
米沢夫妻、花岡靖子、富樫慎二、工藤邦明、杉村園子、警察

石神哲哉　帝都大学理学部数学科出身、高校の数学教師、湯川学の旧友
花岡靖子　弁当屋べんてん亭の従業員、富樫慎二殺害の犯人
米沢　べんてん亭の経営者

米沢小代子　その妻
富樫慎二　花岡靖子の前夫、花岡母娘によって殺害
工藤邦明　印刷会社経営、花岡靖子の知人
杉村園子　花岡靖子が勤めていた錦糸町のクラブの雇われママ
湯川学　帝都大学理工学部物理学科の研究者
草薙俊平　警視庁捜査一課の刑事、湯川学の友人

第一章では、これらの登場人物の内、米沢夫妻、花岡靖子、富樫慎二、工藤邦明、杉村園子、警察の言動から、「ふつうの人間」の異性愛のかたちを写真のポジのように取り出す。第二章では、石神哲哉と湯川学の言動を照らし合わせながら、そのネガとして「容疑者X」こと石神の「献身」のかたちを浮かび上がらせる。そこで最初に、立論の前提として、「ふつうの人間」の意味を検証しておく。

この作品には、「ふつうの人間」という言葉が三箇所で使われている。第一は、湯川が容疑者のアリバイ工作に思いを巡らせる草薙に対して、その言葉を使う場面（82）、第二は、草薙と湯川が容疑者の犯行への執念を語り合うところで、湯川がそれを口にする場面（300）、そして最後は、やはり湯川が容疑者の自己犠牲の大きさに驚いて、それを使う場面（321）である。ここでは、もっとも容疑者の犯行の特徴を具現している最初の場面に着目して、「ふつうの人間」の意味を押さえておく。

問題の場面で、草薙は「チケットの半券なんてものは、ふつうは後生大事に保管しないものだ」（81）と語り、湯川は「ふつうの人間なら、アリバイ工作に用意した半券の保管場所にまで気を配らない」（82）と応えている。二人にとって、映画のチケットの半券を大切に取っておいたり、それを保管する場所を選んだりしないのが「ふつうの人間」である。論考の文脈に即して言い換えれば、「ふつうの人間」とは、生活経験として慣れ親しんでいることを日常の所作のパターンとして構成すると同時に、それを日常の心理の盲点として抱え

る存在である。その意味で、「容疑者X」は、半券を保存し、しかもそれをしかるべき所へ配置して、「ふつうの人間」であることを二重に否定している。

要するに、大多数の人が習慣的に注意を怠り、構造的に見落としていることに関して、それをさりげなく現実として演出するのが「容疑者X」であり、そのトリックにはまる者が「ふつうの人間」である。この作品の「ふつうの人間」たちにとって、見ているのに見えていない最大の盲点、それは、異性愛の言説によって形成される男女関係を、そのまま事実として生きる彼らの現実感覚にほかならない。

その観点から第一に注目したいのは、弁当屋べんてん亭を経営する米沢夫婦である。経営者の米沢は、下の名も与えられていないほどマイナーな人物であるが、紋切型の異性愛の用語で男女関係を語るという習慣を疑っていないという点で、妻の小夜子と共に「ふつうの人間」を誰よりも代表している。それは、この作品のほぼ冒頭、米沢夫婦が登場する場面からすでに明らかである。

石神は毎日のように、勤務先の高校へ行く道を遠回りしてまで、靖子が働くべんてん亭に立ち寄っている。そのときどのような感情が働いているのかを知る手掛かりは、米沢夫婦より前に、万能の話者である語り手によって与えられる。石神が店のガラス戸を開けた瞬間のことについて、語り手はこう語る。

「いらっしゃいませ。おはようございます」カウンターの向こうから、石神の聞き慣れた、それでいていつも彼を新鮮な気分にさせる声が飛んで来た。白い帽子をかぶった花岡靖子が笑っていた。
店内にはほかに客はいなかった。そのことが彼を一層浮き浮きさせた。(7)

「彼を新鮮な気分にさせる声」や「彼を一層浮き浮きさせた」という表現からは、石神の内面を定型化した異性愛の用語ではなく、もっと抽象化された感覚レベルの言葉に換言して語ろうとする語り手の抑制が認められる。ここには、語り手の語りに関して、極めて巧妙な操作がはたらいていると言わざるを

えない。つまり語り手は、石神の性欲望をできるだけ日常の異性愛の用語で語らないように語るという節度を自分に課した格好になっている。石神という人物を現実世界に生かしながらも、異性愛の用語に支えられた世間の男女関係から浮遊させ、彼に「ふつうの人間」では不可能と思われる犯行を可能にさせること。これは作者の東野圭吾にとって、『容疑者Xの献身』の創作における最大の課題の一つだったと思われる。

語り手が表現した「気分」や「浮き浮き」といった石神の靖子への感覚レベルの反応は、そのまま放置されたかに見えて、まもなく米沢夫婦によって察知され、社会化された異性愛の用語へ置き換えられていく。

「例の高校の先生、今朝も来た？」休憩している時に小夜子が問いかけてきた。
「来たわよ。だって、毎日来るじゃない」
靖子が答えると、小夜子は亭主と顔を見合わせてにやにやした。
「何よ、気持ち悪いなあ」
「いや、べつに変な意味じゃないんだって。ただね、あの先生、あんたのことが好きなんじゃないかって、昨日話してたのよ」(9)

夫の米沢もこれに続けて、こう語る。

「こいつによると、ずっとそうだっていうんだよ。靖子ちゃんが休みの日には、あの先生は弁当を買いに来ない。前からそうじゃないかと思ってたけど、昨日確信したってね」(10)
「まあいいじゃないか。本当に気があるんなら、そのうちに何かいってくるよ。とにかくうちとしちゃあ、靖子ちゃんのおかげで固定客がついたわけだから、ありがたい話だ。」(10)

小夜子の台詞にある「好き」、夫の台詞にある「気がある」という言葉は、靖子本人にも違和感なく受けとめられている。語り手は、そのときの靖子の気持ちを代弁して、「あの教師が自分に気があると聞かされても、ぴんと来るものがまるでなかった」(11) と語っている。それは、靖子がその意味を理解できなかったということではなく、石神のことを「アパートの壁のひび割のように、その存在を知りつつも、特別に意識したことはなく、また意識する必要もないものと思い込んでいたから」(11) である。しかし石神は、それでも、元夫の富樫慎二を娘と共謀して殺した靖子を守ろうとする。靖子にとって、その不可解さを受け入れる唯一の方法は、語り手が代弁しているとおり、「この数学教師は靖子のことが好きらしい」(39)、「おそらく小夜子たちがいうように、彼は靖子に気があるのだろう」(123-4) と考えることである。

靖子は、こうした表現の連鎖から、そこまで協力してくれる石神に関して、ある不安を抱かざるをえなくなる。逆に言えば、その不安は靖子の自然の心理に見えて、「好き」や「気がある」という彼女の異性愛の語り口から生まれた強迫観念の表現にすぎない。「しかしもし彼女がほかの男性と親しくしたらどうだろう。それでも今までどおり、力を貸してくれるだろうか。彼女たちのために知恵を働かせてくれるだろうか」(124)。そこで彼女は、赤坂でホステスをしていたころの常連だった工藤邦明が事件後に会いに来たときにも、石神への配慮から、「工藤とは会わないほうがいいかもしれない」(124) と考える。しかし語り手は、数年ぶりに再会した工藤を見送るときの靖子について、「久しぶりに気持ちが高ぶっているのを彼女は自覚した。男性と一緒にいて心が浮き立ったことなど何年ぶりだろうと思った」(122) と慎重な言い回しをしている。

この表現は、石神がべんてん亭に入ったときに感じた「新鮮な気分」や「浮き浮き」といった高揚感を想い起こさせる。そうした種類の高揚感は、靖子にとって、「恋愛」と呼ばれる男女関係へ発展する可能性を秘めた性欲望の予兆としての意味を帯びている。それを裏づけるように、語り手はこのときの靖子の内面について、「工藤に対して恋愛感情を持っているかどうか、自分でもよ

くわからなかった。先日再会するまで、殆ど思い出すこともなかったのだ。好意は持っているが、まだその段階にすぎない、というのがおそらく本当のところだろう」、「あの浮き浮きとした気分は、恋人とデートの約束をした時のものに限りなく近かった」と語っている（150）。

ここからわかるとおり、靖子の性欲望は、「気持ちの高ぶり」、「浮き浮きとした気分」、「好意」、「恋愛感情」、「恋人」、「デート」という順に次数を繰り上げていく仕組みになっている。靖子と石神の性欲望が区分され、石神の「献身」の意味が問われるのは、このときである。つまり、石神にとって、靖子への高揚感は、私利私欲を超えて彼女の守り人となるためには抑制しなければならない劣情としてある。他方、靖子にとって、工藤への高揚感は、「辛いことを忘れたいという欲求」（150）を満たすと同時に、「長い間封印してきた、女性として扱われたいという本能」（150）を目覚めさせるための官能としてある。

このとき石神の存在を意識した靖子に、「いいようのない焦燥感のようなもの」（124）が広がるのは致し方ないことだろう。なぜなら、石神に自分の犯行を隠蔽してもらいたいという願望と、石神の自分への思いを邪険にして、彼に寝返りを打たせてはならないという思惑が拮抗して、彼女の複合心理になるからである。「いつまで、石神の目を盗まねばならないのか。それとも事件が時効にならないかぎり、永久に自分は他の男性と結ばれることはないのか」（124）。「目を盗む」—「他の男性」—「結ばれる」。ここから見えてくるのは、靖子のセクシュアリティに刷りこまれた「性—恋愛—結婚」というロマンティック・ラブ・イデオロギーである。それゆえ靖子は、石神の報復に怯えながら、工藤との交際から結婚へというシナリオに煽られざるをえなくなる。「工藤の本心はわかっていた。彼は暗に、正式につき合ってほしいと伝えてきているのだ。それも将来を見据えた交際にしたいと考えているのかもしれない。」（154）

「本心」—「正式」—「つき合う」—「将来」—「交際」。靖子は八年前にも、こうした男女関係のロジックをなぞって、富樫と再婚したと考えられる。「プロポーズされた時には、まるで『プリティ・ウーマン』のジュリア・ロバーツ

になったような気がしたものだ」(14)。靖子は、理想のロマンスに「幸せ」を重ね合わせた当時のことをそう振り返っている。しかし、現実としての「幸せ」の効果は、富樫が会社を首になって続かなくなる。それ以降は夫からの暴力の繰り返し、ようやく離婚が成立したにも関わらず、富樫は復縁を迫り続ける。「冷たいな」(12)、「つれないな」(13)、「俺だって真剣なんだぜ」(16)、「もう一度考え直さないか」(17)、「俺だって、昔とは違うんだ」(17)、「俺にはおまえが必要なんだよ」(17)。富樫もまた、靖子にまして、「色恋」(225) 沙汰の語り口の常用者として造形されている。語り手は、そのころの靖子の心境をこう説明している。

> 土下座までする彼の姿を見ていると、芝居とわかりつつ、哀れに思えた。一度は夫婦になった仲だけに、どこかに情が残っていたのかもしれない。つい、靖子は金を渡した。それが間違いだった。味をしめた富樫は、さらに頻繁にやってくるようになった。(15)

ここでの語り手の語りには注意が必要である。最初の文章の「哀れに思えた」という常套句は、「思えた」によって、靖子の心情を写し取ったものとわかる。しかし、それに続く文章は、もう少し複雑で、二種類の解釈ができる。最初の文章の流れから見れば、「一度は夫婦になった仲だけに、どこかに情が残っていたのかもしれない」も描出話法として、靖子の心情を写し取ったものと解釈できる。しかし同時に、これを語っているのが語り手である以上、ここを語り手の推測と取ることも可能である。そう考えると、文中の「夫婦になった仲」や「情が残る」という異性愛の決まり文句は、靖子自身による心情の表現を語り手も追認するという形式を取って、二重に定型化されていたことになる。ここには、作者の創作技法上のトリックが認められる。

これと同様のことは、靖子が工藤と知りあった当時のことを回想するときにも起こる。

彼が靖子に気があることは、無論彼女もわかっていた。彼女も好意を持っていた。しかし、いわゆる男女の関係になったことは一度もなかった。何度かホテルに誘われたことはある。そのたびに彼女はやんわりと断った。妻子ある男性との不倫に踏み切る勇気はなかったし、その時点で工藤に隠していたが、彼女にも夫がいた。(118)

ここにも、靖子の異性愛に関する表現パターンがはっきりあらわれている。「気がある」—「好意」—「男女の関係」—「ホテル」—「不倫」。しかし、こうした靖子の不安を語る箇所もまた注意を必要とする。ここで語っているのも靖子ではなく、やはり語り手だからである。もし語り手が靖子の内面をそっくり取り出すのであれば、たとえば独白形式で「彼が（自分に）気があることは、無論わかっていた」と語るべきところだろう。そうすれば、「気がある」という表現は靖子自身のものとわかる。ところがここでは、語り手があくまで靖子を第三者と想定して、「彼女」の内面を説明している。それゆえ、これは厳密に言えば、語り手自身の語り口ということになる。つまり、語り手もまた、登場人物たちの性欲望を語るときには、社会に流布している異性愛の用語をなぞってしまう、ということである。

但し、文学の約束事では、万能の話者としての語り手は、登場人物の内面を代弁する権限を与えられているので、読者は、ここでの語り口が語り手自身のものであるという疑念を浮かべてはならないことになっている。但し、東野圭吾にしてみれば、そこにこそ、文学の約束事を逆利用して、つまり一種の禁じ手を行使して、性欲望の表現に関する微妙な操作を働かせる余地が残されたように思われる。つまり、このときの靖子の内面は、たとえ語り手が発した「気がある」、「好意」、「男女の関係」、「ホテル」、「不倫」という言葉によって世俗のかたちを与えられていたとしても、読者はそれをそのまま、靖子自身の性欲望の表現として受け入れるように仕向けられている。言い換えれば、語り手は、読者にそれと悟られることなく靖子と協力して、「ふつうの人間」たちに

共有されている異性愛の言説を作品内に張り巡らすことに加担していると考えられる。

さらに、その効果を補強しているのが、草薙俊平や岸谷刑事に代表される警察関係の人間たちの捜査の語り口である。たとえば草薙と岸谷は、工藤と靖子の「関係」(165) を問題にして、こう語り合う。

[草薙]「工藤と花岡靖子は以前から深い仲だったけど、それを隠し続けていた、ということもありうるだろ。富樫殺しでは、それを利用したのかもしれない。関係を誰にも知られていない人間となれば、共犯者にはうってつけだからな」
[岸谷]「もしそうなら、今もまだ関係を隠し続けるんじゃないでしょうか」
[草薙]「そうとはかぎらない。男女の関係なんて、いずれはばれるものだからな、どうせならこの機会に再会したふりをしたほうがいい、と考えたのかもしれない」(165)

刑事たちもまた、米沢夫妻や靖子と同様、「深い仲」や「男女の関係」という異性愛の決まり文句を引用しながら、事件を再構築し、捜査を進展させようとしている。その好例は、靖子が勤めていた錦糸町のクラブの雇われママ、杉村園子と草薙の間の会話に認められる。杉村は工藤と靖子の関係について、「何となく男女の関係にまではならなかったようです」(223) と語り、草薙はそれを受けて、「彼女のいっていることはおそらく当たっているだろう」と考え、語り手も彼の内面を代弁して、「男女の関係に関して、ホステスたちの勘の鋭さは刑事のそれをはるかに凌駕する」(224) と続けている。ここには、警察が社会の異性愛の語り口を反復することによって、「ふつうの人間」の代表として、世間のセクシュアリティの安定化を図るという、治安権力の戯画を見るべきかもしれない。しかし同時に、庶民の語り口を警察が補強し、その警察の語り口をまた庶民が補完するという、社会のセクシュアリティの言説にまつ

わる循環構造も見逃せないだろう。このことは、草薙が工藤に事情聴取をしたときに、もっとも誇張されたかたちであらわれる。

草薙が工藤と靖子の「関係」(171) を詮索することに業を煮やした工藤は、刑事を説得するために、むきになってこう切り返す。「はっきりと申し上げておきましょう。私は彼女に気があるわけです。それは恋愛感情です。だから事件のことを知り、彼女に近づくチャンスだと思って会いに行った。いかがですか。このようにいえば納得していただけますか」(172)「気がある」―「恋愛感情」―「近づく」。これには、さすがの草薙も「苦笑」(172) するしかなかった。これこそ、警察が市民を誘導して語らせようとする異性愛の言説の見本であり、それによって正当化された男女関係の模範だからである。工藤はただ、刑事としての草薙が聞きたいことを聞きたいように、但し露骨な当てこすりとして語ってみせたにすぎない。その結果、草薙は、工藤が「シロ」(176) であり、「本気で花岡靖子に惚れている」(176) と結論せざるをえなくなる。さらに草薙は石神についても、べんてん亭で得た情報として、「おまえの親友の石神は、花岡靖子に惚れている」(212) と湯川に伝えている。「惚れている」―草薙はあくまで紋切型の言葉を繰り返しながら、警察の一員として、工藤や石神の異性愛のかたちを定型化し続けていく。

このように、『容疑者Xの献身』では、男女関係のからんだ事件は、警察の取り締まりの対象として、性のモラルに介在する治安権力を反映した刑事の語り口、つまり捜査のエクリチュールの中で再構築され、解明されなければならない。その整合性が保証されてはじめて、事件は「犯行」として社会化され、処罰の対象となり、世間のセクシュアリティの安定化も促進されるからである。その意味で、べんてん亭の米沢夫妻や錦糸町のクラブの杉村は言うまでもなく、犯人としての靖子、事情聴取の対象者としての工藤、そして刑事としての草薙の異性愛の語り口は、これまで見たとおり、見事なほどそろっていると言わざるをえない。

こうした東野圭吾の一貫した語りの操作に支えられてはじめて、石神は、こ

れらの登場人物たちに代表される「ふつうの人間」の生活意識を超えた事件を画策し、異性愛の言説から生まれた男女関係の輪から遊離して、ぽつりと人知れず浮かぶことができる。その中空の穴として。つまり、世間のセクシュアリティの言説における未知数「X」として。

Ⅱ
石神の「献身」のかたち
石神哲哉 vs. 湯川学

石神は優れた観察力と推理力によって花岡母娘の富樫殺害を見抜き、即座に隠蔽工作に関わることを決める。その理由について、語り手はこう語っている。

> 自分が守らねばならない、と石神は改めて思った。自分のような人間がこの美しい女性と密接な関わりを持てることなど、今後一切ないに違いないのだ。今こそすべての知恵と力を総動員して、彼女たちに災いが訪れるのを阻止しなければならない。(44)

花岡母娘に「災いが訪れるのを阻止」して、二人を「守る」ことで、靖子と「密接な関わり」を持つ。石神はこの実現にむけて、靖子たちのアリバイを仕組むばかりでなく、二人が富樫を殺した翌朝、自らホームレスの男を殺して富樫の死体とすり替え、完全犯罪を仕立てようとする。しかし彼は、それへの見返りに、靖子との「男女の関係」を望んだわけではない。彼にとって、隠蔽工作はそのための手段ではなく、それ自体が靖子との「密接な関わり」の実現だったからである。

読者がその根拠を知るのは、物語の終盤、警察の留置場に入った石神の独白を介してである。それによれば、一年前、石神が生きている意味を失って自殺を図ろうとしたまさにそのとき、花岡母娘が引越の挨拶に訪れた。この母娘の「綺麗な目」(344) に魅了された彼は、それを境にして人が変わる。語り手に

よれば、「石神の生活は一変した。自殺願望は消え去り、生きる喜びを得た」(344)。彼には、「崇高なるものには、関われるだけでも幸せ」と感じられ、「彼女たちとどうにかなろうという欲望は全くなかった」(345)。読者は、この語りの工夫によって、花岡母娘を救おうとする石神の努力が終始、「崇高なるもの」としての彼女たちへの「恩返し」(345) であったと事後に気づくことになる。

それゆえ、花岡母娘を守り始めたころの石神が、自分の性欲望を「男女の関係」という異性愛の用語で語らなかったのは当然である。それこそ、彼が世間のセクシュアリティの尺度から外れた未知数「X」として、自分の性欲望に課した倫理と言ってよいだろう。しかし、この倫理はあちこちでほころびを見せる。

たとえば石神は、死体となった富樫の顔を見たとき、「こういう男に靖子は惚れたのだな」(45) と思う。それと同時に、「小さな泡が弾けるように嫉妬心が胸に広が」り、彼は首を振って、「そんな気持ちが生まれたことを恥じた」(45)。これが語り手の語りである以上、この「嫉妬心」という言葉も、どれほど正確に石神の感覚を伝えているのかはわからない。しかし、「そんな気持ち」がどのように生まれてきたのかに関しては、語り手の語りから読み取れる。

靖子が事件後に「ため息」をついたとき、石神はそこに「官能的な響き」を聞きつける (46)。しかし、石神にとって、それに身を委ねることは許されても、靖子に「惚れる」ことは禁忌である。他方、靖子や富樫にとって、相手に「惚れる」のは現実そのものだった。それゆえ、石神の「嫉妬心」は、自分にとってタブーの対象となる女が、他の男にとって性欲望の対象になるというズレを社会的に表現した心理だったと言える。彼がその心理を「恥じた」のは、自分の性欲望がそれを規制する倫理のチェックをすり抜けて、世俗の異性愛のかたちへねじれ始めたからである。

この作品では、もう一箇所、石神に関して「嫉妬心」という言葉が使われる。彼が工藤を尾行し、写真を撮ったときである。そのとき石神は、「靖子が好むのはこういう男なのか」と思う (197)。これは、彼が富樫について、「こうい

う男に靖子は惚れたのだな」ともらしたときと同型の感想である。しかし今回、石神はそれを邪念として振り払うどころか、「世の中の多くの女性が、自分と工藤のどちらかを選べといわれたなら、間違いなく彼を取るだろう」(197)とさえ思う。石神が「嫉妬心に駆られつつ」(197) カメラのシャッターを押したのは、このときである。但し、ここでの「嫉妬心」もまた、語り手の語りとして、これから見るとおり、二重の意味を帯びている。

石神は自分の性欲望が「男女の関係」として世俗化されるのを忌避しながら、同時に、他の男女がそのように性欲望を生きるのを羨む男としての自分を残しているように見える。あこがれてはならないと自己抑制したものが、他人にとって現実のものになっているのを目のあたりにしたとき、あこがれは絶望的に膨らんでいく。石神の「嫉妬心」は、このように、脱世俗化の努力によって純化しきれなかった性欲望の余剰が、再び異性愛の言説に取りこまれ、日常へ折り返された心理である。この心理が現実として働くかぎり、石神の「献身」は成就されることはない。そのことを誰よりも知っていたのは、彼自身である。それでは石神は、このジレンマをどのように克服したのだろう。

石神が工藤の写真を撮ったのは、もちろん偽装工作のためである。しかも彼は、「最悪のケース」を想定して、その写真に合わせた靖子宛の文章まで用意している。

「貴女に訊きたい。この男性とはどういう仲なのか。もし恋愛関係にあるというのなら、それはとんでもない裏切り行為である。私が貴女のためにどんなことをしたと思っているのだ。私は貴女に命じる権利がある。即刻、この男性と別れなさい。さもなくば、私の怒りはこの男性に向かうことになる。この男性に富樫と同じ運命を辿らせることは、今の私には極めて容易である。その覚悟もあるし、方法も持っている。繰り返すが、もしこの男性と男女の関係にあるのならば、そんな裏切りを私は許さない。必ず報復するだろう。」(200-1)

この文章から読み取れるのは、人間は言葉を記号として操りながら、自分以外の者になるという記号学の知見である[2]。それは、この作品の登場人物たちにも当てはまることだろう。たとえば靖子は、「好き」、「気がある」、「好意」、「恋愛感情」、「デート」、「親しくする」、「つき合う」、「交際」、「結ばれる」という言葉を記号として組み合わせて、自分以外の者になろうとする。つまり、「恋人」と呼ばれる存在に。他方、この方法を模倣することによって、犯行の偽装工作に利用しようとする者もいる。「どういう仲」、「恋愛関係」、「裏切り行為」、「別れなさい」、「怒り」、「運命」、「男女の関係」、「許さない」、「報復」。石神もまた、靖子宛の文章でこれらの言葉を記号として組み合わせて、自分以外のものになろうとする。いわゆる「嫉妬に狂う男」に。

石神にとって、「最悪のケース」とは、自分をそういう存在に仕立て上げ、靖子のために元夫を殺しながら、彼女の「裏切り」に逆上した男として、刑事の目を自分に引きつけるという展開だった。そう考えれば、石神の「嫉妬心」は、靖子への文面に「威嚇効果」(200) をもたせるための迫真の演技だったように思われてくる。そこから逆算すれば、彼が工藤の写真を撮ったときの「嫉妬心」もまた、二重の意味を帯びていたことになる。一つは、語り手が示唆したとおり、工藤への「真」の「嫉妬心」、もう一つは、靖子への文面をもっともらしく見せるために、その「真」に迫ろうとして、それと錯覚するほどに掻き立てられた「嫉妬心」である。誰よりも「嫉妬心」から遠く離れているべき者が、「嫉妬心」そのものになりきり、世俗の情念のかたちに没入すればするほど、世俗から遠く離れた守り人になれるという逆説。この時点の石神にとって、「献身」とは、その逆説を希望として生きることだったと言える。

しかし石神はまもなく、湯川が「すべてを見抜いている」(268) と察し、「最悪のケース」のために用意しておいた三通の短文の手紙を靖子に渡さざるをえなくなる。そのいずれの文面にも、「嫉妬に狂う男」の声が響きながら、靖子への「献身」の希望が倍音として託されている。他方、語り手は、これらの手紙の内容を事後に振り返り、「いずれもが靖子のストーカーをしていたことを

示すものだった」(340) と語り、読者が石神を「ストーカー」として認知するように念押ししている。

「最近、少し化粧が濃くなっているようだ。服も派手だ。そんなのは貴女らしくない。もっと質素な出で立ちのほうがよく似合う。それに帰りが遅いのも気になる。」
「何か悩みがあるんじゃないのか。もしそうなら、遠慮なく私に話してほしい。そのために毎晩電話をかけているんだ。私なら貴女にアドバイスできることはたくさんある。ほかの人間は信用できない。信用してはいけない。私のいうことだけを聞いていればいい。」
「不吉な予感がする。貴女が私を裏切っているのではないか、というものだ。そんなことは絶対にないと信じているが、もしそうなら私は貴女を許さないだろう。なぜなら私だけが貴女の味方だからだ。貴女を守れるのは私しかいない。」(292)

石神はまた、工藤の自宅のポストにも匿名のメモを入れて、自ら「ストーカー」として認知されるように仕組んでいる。「花岡靖子に近づくな　彼女を幸せにできるのは　おまえのような男ではない」(270)。それを聞いた靖子は、「石神が嫉妬の炎を燃やしている」(273) と想像して、石神の偽装工作にはまる。いや、はまったのは警察も同じである。それどころか、警察は語り手の誘導に合わせるように、「嫉妬に狂う男」を「ストーカー」にすり替えて、石神の犯行に加担するように動く。

たとえば草薙は、巷の夫婦について、「別れたから明日は無関係。お互いに干渉し合わない。赤の他人に戻る。それで済めばストーカーなんてものは存在しないわけです」(170) と語っている。さらに彼は、工藤へのメモの差出人の行為を「ストーカーまがいのこと」(293) と受け取り、草薙の上司・間宮警部に至っては、石神の部屋で発見された集音器を偽装とも考えないで、「石神は

典型的なストーカーだ」(295) と断定している。つまり刑事たちは、靖子がおそらく石神の入れ知恵から口にした「ストーカー」(291) という言葉をなぞり、それを補強している。ここでも、警察は異性愛の言説の逸脱者を見張り、社会のセクシュアリティの安定化に貢献している。しかし東野圭吾は、このすべてを石神が仕掛けたセクシュアリティの罠の効果にしたかったわけである。

かつて草薙が石神の数学の試験問題について、「先生のお作りになる問題なら難しそうだ」と漏らしたとき、石神は「難しくはありません。ただ、思い込みによる盲点をついているだけです」と答えている (242)。警察にとって「思い込みによる盲点」があったとすれば、それは、これまで『容疑者Xの献身』の評者たちがとらわれてきた、犯人の偽装工作のレベルに留まらないだろう。それよりむしろ、石神が犯行に利用した異性愛の言説と、それによって形成される現実のかたち（たとえば「ストーカー」）にこそ、この事件の下部構造としての警察の「思い込み」があったと言うべきである。警察が容疑者を「ストーカー」と見たことによって出現した「盲点」、石神が身を潜め、靖子を隠し、守ろうとしたのは、まさにその闇である。

しかし、この闇は、思わぬところからほころびを見せる。それを知るには、石神が物語の序盤で「刑事に対して一つだけミスをしたことに気づいた」(74) 地点まで戻らなければならない。その「ミス」とは、草薙から「花岡靖子との関係」を訊かれたとき、彼が「挨拶をする程度」と答えながら、「彼女の働く店で弁当を買っていること」を言い漏らしたことである (74)。彼はこのとき、刑事に「花岡靖子との関係」を意識させられることによって、それについて語っても語らなくても怪しまれるものを無意識に語り落としていたと考えられる。それが警察に「知られたくないもの」であると同時に、彼自身も「知りたくないもの」だったからである。無意識を意識へ転じさせようとする刑事の働きかけに抵抗することは、そこに彼の自我には許容されないもの（自我を苦しめるもの、社会に受け入れられないもの、つまり靖子への潜在的願望としか呼べないもの）が働いていることを示している。しかしそのものは、たとえ抑圧

されても、別の回路を経て繰り返し意識へ溢れ出ようとする。その生々しさは、石神のさりげない素振りとは裏腹に、周囲の「ふつうの人間」に性欲望の記号として読み解かれてしまう。そのとき読解のツールになるのは、彼にとって皮肉なことに、異性愛の用語にほかならない。

石神が靖子の休日にはべんてん亭に来ないことに気づいて、そこから彼が彼女に「気がある」と勘ぐり始めたのは、すでに見たとおり、凡人の典型と目される米沢夫妻である。靖子はその話が刑事に伝わったことを知り、石神に「あなたはあたしに会いたくて弁当を買いに来ている」(209) と噂されていることを伝える。そのときの彼の驚きについて、語り手はこう代弁している。

> それは誤解ではなかった。事実、彼は靖子の顔を見たくて、毎朝のように弁当を買いに行っているのだ。そんな自分の思いが彼女に伝わることは期待しなかった、といえば嘘になる。だが、他の人間にまでそんなふうに見られていたのかと思うと、全身が熱くなった。自分のような醜い男が、彼女のような美しい女に恋い焦がれる様子を見て、第三者たちは嘲笑していたに違いない。(209)

石神の靖子への「思い」は、「第三者」の視点から「恋い焦がれる」と読み替えられ、二人の存在は「美女と野獣」の関係に置き換えられる。彼がたじろいだのは、性欲望として社会化された自分の性的衝動が「嘲笑」の対象になっていたからである。石神の偽装工作のほころびは、そういう男としてのナイーブなところから始まる。それは、この作品の冒頭、まだ事件が起こる前の段階で、彼がべんてん亭に足繁く通っていたときから予見されていたわけである。そのことを裏書きするように、この作品には、石神を「純粋な男」(235) と見て、やはりべんてん亭での観察から、彼に疑惑をむけた人物がいる。それこそ、ガリレオこと湯川学である。

*

湯川学が石神哲哉を容疑者と考え始めたのは、「石神が靖子に好意を持っていることを見抜いたのがきっかけ」(232) である。靖子もまた、湯川と話したとき、「この男は、石神が彼女に好意を寄せていることを知っている」(237) と悟る。たしかに湯川は、靖子に「彼の気持ちに気づいていないわけではないでしょう？」と質問してもいる。石神もまた、「[湯川] は、石神が靖子に好意を持っていることまで見抜いているようだ」と察し、それでも「彼女への気持ちを気取られるような迂闊なことをした覚えはまるでなかった」と思っている (249)。ここで注意したいのは、湯川にも石神にも、「好意」や「気持ち」という、性表現としてはもっとも身体性を感じさせない言葉が配分されている点である。

他方、草薙は「石神と花岡靖子の関係」という刑事用語をなぞりながら、それをもっと世俗化した「密接な関係」という言葉で探っていく (253)。但し、湯川はそれを聞いて、「彼らの間には何もないだろう」とたしなめ、さりげなく「思う」という言葉を選んで、「ある些細なことから、彼の花岡靖子に対する思いを察知した」(253) と語る。草薙は石神が「密接な関わり」という言葉で示唆しようとしたものを「密接な関係」という言葉で強引に身体化して、その「裏づけ」(253) を得ようと捜査に走り、事件の解明を遅らせている。それは、草薙が警察の一員として、異性愛の言説から男女関係の現実のかたちを想定し、その根拠を捜査によって肉づけしようとしたからである。

それに対して湯川は、草薙にはとらえきれないレベルで石神の性欲望を「察知」して、警察より早く事件の真相に辿り着く。その理由は二つあると考えられる。一つは、「いわば直感のようなもの」(254) であり、これはあとで見るとおり、「[石神] のことをある程度わかっている人間でなければ理解することは難しい」(254)。しかし、もう一つ、湯川自身もはっきり自覚できていなかったにも関わらず、もっと合理的に説明のつく理由が用意されている。それは、

彼が「好意」、「気持ち」、「思い」という、身体性の希薄な性表現を石神と共有しながら、異性愛の言説を過度に世俗化＝肉欲化させることなく、石神の性欲望の動きを柔軟にとらえることができたからである。

石神が「彼女への気持ちを気取られるような迂闊なことをした覚えはまるでなかった」と思ったのは無理もないだろう。石神にとって、靖子への「気持ち」そのものが、本来「覚え」のないもの、つまり潜在的願望に根ざしたものだったからである。しかし、石神は「思い」や「気持ち」という言葉を思い浮かべるだけでも、その「意識できないはずのもの」を意識し、それを「意識してはならないもの」として意識せざるをえなくなる。そこから生じるこわばりに、彼が「迂闊」だった理由がある。一つは、その心理メカニズムを介して、彼の靖子への潜在的願望が外界（意識面や人間関係）へ漂い出ることに気づかなかった点、もう一つは、それが自分の言葉や表情にあらわれ、「ふつうの人間」の一人である湯川にも「ある些細なこと」として、つまり性欲望の記号として読み解かれることを忘れていた点である。

その「ある些細なこと」とは、石神が湯川と歩きながら、オフィスビルのガラスドアに映る自分たちの姿を見て、「それにしても湯川はいつまでも若々しいな。俺なんかとは大違いだ。髪もどっさりあるし」（109）と漏らしたことである。湯川は草薙に、そのときの驚きをこう説明している。「なぜならあの石神という人物は、容姿など絶対に気にする男ではなかったからだ。人間の価値はそんなものでは計れず、それを必要とするような人生など選ばない、というのが昔からの主義だった。そんな彼が外見を気にしている」（312）。そこから湯川は、「［石神］は外見や容姿を気にせざるをえない状況にいる、つまり恋をしている」（312）と気づく。

草薙は、その意を察して、「間もなくその惚れている女に会うから、か」（312）と続ける。湯川はそれに頷きながらも、「惚れている女」という世間の用語を避け、靖子を「彼の意中の相手」（312）と言い換えて、石神の心理構造をより正確に言い当てている。それでも、この時点ではまだ、湯川にも石神の事件へ

の関与に確信がもてなかったと推測される。湯川が石神と改めて会って、べんてん亭へ同行しようとしたのは、「彼の態度から何かわかると思ったから」(313) というより、正確に言えば、その「意中の相手」への石神の「恋」の手掛かりを得るためだったからである。

その手掛かりは、靖子を介した性欲望の三角関係として設定されている。石神が湯川とべんてん亭にいるところへ、工藤が入ってきたからである。石神はこれまでにも、工藤と靖子が「親しげに話している」(143) ところを見ている。工藤にタクシーで送ってもらったときの靖子には、「それまで見たこともない華やいだ顔」や「女の顔」さえ浮かんでいたことも想起される (143)。それゆえ石神は、目の前の工藤と靖子を見つめざるをえなくなり、自分を含めた三者の関係から「焦りに似た感情」(143) を覚えることになる。

事件の捜査も終盤になったころ、湯川はこのときのことを振り返りながら、「あれで確信した。石神の恋の相手は彼女だとね。彼の顔には嫉妬の色が浮かんでいた」(313) と草薙に語る。語り手が表現した石神の「焦りに似た感情」は、性欲望の露骨なあらわれを抑えた用語になっているという点で、それを「嫉妬の色」と呼ばれたくない石神の願望を忠実に代弁していたかもしれない。しかし、そのときの石神の表情は、工藤への「この男は何者だ」(143) という不審の念を帯び、靖子の「それまで見せたこともない華やいだ顔」や「女の顔」を残り香のように漂わせながら、湯川によって「嫉妬の色」として読み解かれてしまう。湯川の異性愛の言説の中で、石神の「意中の相手」が「恋の相手」へ変容するのも、このときである。それにつれて、石神が靖子への潜在的願望を宿して身を潜めようとした「献身」の闇は、どんどん世間の「恋愛」という性欲望の光へ晒されていく。石神が靖子の身代わりとして警察へ出頭しようと決めた時期は、このときと合致する。

警察が以前から石神を「ストーカー」と見なしていたことは、その意味で、彼自身にとって好都合だったと言える。石神に残された道はただ一つ、異性愛の言説をなぞって「ストーカー」を演じきり、本物と見極められなくなること

だからである。それはまた、彼が隠れ蓑としてきた「嫉妬に狂う男」を「ストーカー」という社会的人格として生きることでもある。しかしこれは同時に、彼の「献身」を支える心理構造に致命的とも言えるリスクを伴うことにもなりうる。彼の演技が徹底され、いわば実技に近づくにつれて、そこから奥行きが消えていくからである。

石神にとっては不覚だったかもしれないが、彼の靖子への当初の態度は、他の人間たちに「気がある」、「惚れる」、「恋をしている」という言葉で読み解かれる程度に性欲望のあらわれを含んでいた。それは、彼が抑えようとしても抑えきれなかった靖子への潜在的願望の痕跡である。それゆえ、靖子に「気がある」、「惚れる」、「恋をしている」と思われることは、彼にとって、世間から見られた自分を仮面としてかぶせられるに等しいことだったと言える。しかし、そのときの彼には、それに対する驚きがあったことからもわかるように、まだ仮面の背後に素顔としての靖子への潜在的願望が想定されていた。しかし、仮面が素顔に貼りついて、その想定が崩れ、靖子への潜在的願望の感覚が薄れるにつれて、彼自身の演技はゆとりをなくし、平板になり、深さを失っていく。そのターニングポイントは、湯川がべんてん亭で彼の顔に「嫉妬の色」を見たころと重なり合わされている。それ以降、石神は自発的に「嫉妬に狂う男」を仮面としてかぶることによって、偽装工作を展開せざるをえなくなっていくからである。

しかしこれは、仮面が自己同一性の原理として素顔に張りついて、仮面と素顔の区分を消し去っていくことを暗示している。言い換えれば、石神が「嫉妬に狂う男」を演じれば演じるほど、彼はそれになり、その程度に比例して偽装工作を進めることはできるが、その代償として、それに反比例するように靖子への潜在的願望から切り離されていくように思われる。このからくりの逆説は、彼が「ストーカー」を仮面＝素顔として演じながら、草薙に犯行を自供する段階でピークに達している。

警察の取調室の石神で何より象徴的なのは、その表情、というより「全くの

無表情」(276)、「見事に感情を殺しきった顔」(277) である。もし「素顔」という概念が、「内部と外部のずれが消失しているような状態」(鷲田、65) を含意しているとすれば、このときの石神の顔ほど見事な「素顔」があるだろうか。いや、むしろ、このときの石神にとって、顔は仮面でも素顔でもなく、いわば空虚な平面だったと言うべきかもしれない。いかにもそれらしい異性愛の表現を組み合わせて「ストーカー」を造形し、それになりきろうとする者にとって、自分の顔から「ストーカー」以外のなんらかの意味を読み取られ、人間としての存在の奥行きを探られることは、あってはならないことだったからである。それゆえ、石神の自供もまた、すべて淀みなく、「嫉妬に狂った男」が逆上して「ストーカー」になり果てたことを示していなければならなかった。

「私は花岡靖子のことは何でも知っている」(277)
「いわなくてもわかります。彼女のことならなんでも」(287)
「私は花岡靖子のボディガードなのです。彼女に近づいてくる腹黒い男たちから彼女を守るのが、私の役目です。」(278)
「彼女を苦しめる男が現れたら、一刻も早く排除する必要がある。それが私の役目です。」(280)
「ありました。もちろん、何度もいいますが、世間には秘密の仲です。」(278)
「『あの女は……花岡靖子は』石神は顎を少し上げて続けた。『私を裏切ったんです。ほかの男と付き合おうとしている。私が元の亭主を始末してやったというのに。』」(289)

異性愛の言説を守る立場にある刑事の草薙も、さすがにこの自供には「どうも奇妙だ」(279)、「その話には不自然なところが多い」(280) と違和感を覚えている。彼は湯川にも、「正直いうと、しっくりこない。話に矛盾はない。筋は通っている。だけど、何となく納得できない。単純ないいかたをすると、あの男があんなことをするとは思えない、という気持ちだ」(297) と告白してい

る。特に注目すべきは、語り手が草薙を代弁して、「少なくとも、今まで草薙が持っていた石神のイメージとはかけ離れていた」(280-1) と語るところである。

このとき草薙は、石神の語ることと自分の知る石神との間にズレを感じている。彼は石神が「ストーカー」であることを疑っているのではなく、「ストーカー」自身の整合性のある説明から、生身の石神がほとんど感じられないことを訝っているのである。言い換えれば、石神が話していることはリアルであっても、そのリアリティ（現実性）を支える条件としてのアクチュアリティ（事実性）が彼の話から抜け落ちているということである。この生活者としての草薙の感覚には、正確な人間理解が含まれている。もし記号で世界を区分する人間の能力が「身体性に関する一連の分節／統合能力」として、「行為の分節／統合的な秩序のなかに実現される」（橋爪、84）とすれば、「ストーカー」という言葉を記号として利用しながら捏造された石神の存在には、それに相当する「行為」の分節は認められても、それに見合う「身体性」の分節が不十分だったことになる。ここに、石神が「ストーカー」という存在を隠れ蓑として身を隠した、その所在のヒントがあるように思われる。つまり、石神は徹底して記号としての「ストーカー」をつくり上げ、それを「全くの無表情」に見える顔の平面と置き換えることによって、記号で分節化される以前の生身（靖子への潜在的願望）をその平面の背後として温存しようとしたのである。

それに対して警察は、石神の自供内容に関して、「大きな疑問点」もなく、「作り話だと考えるほうが不自然」だと考えて、それを信じざるをえなくなる(285)。草薙にしても、「はっきりとした疑問点が一つでもあれば話が違うんだが、見事に何もない。完璧だ」(297) と語り、殺人の偽装を見逃しながら、「はっきりとした疑問点」になったはずの異性愛の言説の偽装も見落としてしまう。言い換えれば、東野圭吾は、石神がそれを見越して、殺人の方法と異性愛の言説という二つのレベルで偽装工作をほどこせるように作品を構造化していたわけである。

殺人の方法のレベルとは、富樫とまったく無関係の別人を殺して、富樫と入

れ替え、富樫の死体を隅田川へ投棄することによって、自分の犯した殺人で（但し警察から見れば富樫殺害の容疑で）逮捕され、服役を覚悟することである。他方、異性愛の言説のレベルとは、「嫉妬に狂う男」が逆上して靖子の元夫である富樫を殺し、彼女の「裏切り」に会って「ストーカー」に変貌するというシナリオを現実として生きることである。しかし警察は、この作品の評者たちと同様、前者のレベルにしか注意を向けず、後者のレベルを構造的に見落としてしまう。

これは湯川にも言えることである。彼が石神の「思い込みによる盲点」を問題にしたときにも、その注意はもっぱら殺人の偽装に向けられていた。それゆえ、湯川が次のように語るとき、それは彼自身の想像力の乏しさへの皮肉になっている。「凡人が隠蔽工作を複雑にやろうとすると、その複雑さゆえに墓穴を掘る。ところが天才はそんなことはしない。極めて単純な、だけど常人には思いつかない、常人なら絶対に選ばない方法を選ぶことで、問題を一気に複雑化させる」(263)。この文脈では、「極めて単純な、だけど常人には思いつかない、常人なら絶対に選ばない方法」とは、石神が靖子の富樫殺害を隠蔽するために、別の殺人を犯すということであり、湯川によれば、それが「今回の驚くべきトリック」(321) だった。しかし、そこに焦点化した湯川の目は、真に「極めて単純な、だけど常人には思いつかない、常人なら絶対に選ばない方法」が、石神の靖子への潜在的願望に根ざした異性愛の言説の操作にあったことをとらえきれない。たとえば彼には、石神が「自分をストーカーに貶めてまで彼女を庇う」(331) ことさえ想像できなかった。湯川が「凡人」、つまり「ふつうの人間」の一人になったのは、花岡母娘への石神の「大きな犠牲」(321)、つまり二重殺人のトリックが彼の予想を超えていたからというより、「文学や芸能についても詳しかった」(165) はずの彼が、異性愛の言説に自己撞着していたからである。

誰もが慣れ親しんで、気づかなくなっている異性愛の語り口、それを道具として利用し、「凡人」の「思い込みの盲点」をつくり出して、「問題を一気に複

雑化させる」こと。この事件が非日常性の気配を漂わせ、石神が非凡な人間存在のモードを生き始めるのは、その次元においてである。つまり石神は、セクシュアリティの言説の同化作用を逆利用して「ふつうの人間」の性欲望を操り、同時に自分自身の性欲望を抑制しながら、靖子への潜在的願望を彼女にそっくり捧げようとしたのである。そこにこそ、石神の「献身」のかたちはあらわれる。その意味で、この事件は殺人事件であるばかりでなく、根源的に性犯罪でもある。

他方、「ふつうの人間」として湯川にできるのは、石神を思う旧友として、二重殺人という「驚くべきトリック」の真相を靖子に伝え、彼女の判断に「賭けて」みることである（332）。しかし、そのときの彼には、「愛する」という異性愛の用語を反復することによってしか、石神の「献身」を語ることができない。読者が湯川について、「愛する者のためなら罪を被ることも躊躇わない—そういう『献身』が存在することを湯川は誰よりも知っている」と聞かされるのは、『容疑者Xの献身』から約6年を経て、ガリレオシリーズの最新作『真夏の方程式』（346）が出版されるに至ってからである。

「このことをあなたに教えるのは、じつに心苦しい」彼は実際、苦痛そうに顔をゆがめていった。「石神がそのことを、絶対に望んでいないからです。何があっても、あなたにだけは真実を知られたくないと思っているでしょう。それは彼のためじゃない。あなたのためです。もし真相を知ったら、あなたは今以上の苦しみを背負って生きていくことになる。それでも僕はあなたに打ち明けずにはいられない。彼がどれほどあなたを愛し、人生のすべてを賭けたのかを伝えなければ、あまりにも彼が報われないと思うからです。彼の本意ではないだろうけど、あなたが何も知らないままだというのは、僕には耐えられない」（322）

湯川はまた、二重殺人による隠蔽工作の仮説を草薙にも極秘を条件に伝え

る。しかし、それを聞いた草薙は、「まさか」と驚き、「そんなことありえない」、「そんな馬鹿なことがあるはずがない」と思う（324）。すでに彼はその段階までに、「石神がストーカー行為を働いていたこと」を物証で固めて、「いくら庇うためとはいえ、そこまでの偽装ができるとはとても思えない」と結論していたからである（300）。草薙は続けて、「何より殺人の罪を肩代わりできる人間なんて、この世にいるか？　靖子は石神にとって家族でも妻でもない。じつは恋人ですらない女なんだぜ」（300）と湯川に訴える。たしかに靖子は、石神にとって、家族、結婚、恋愛という制度のどれからも外れた「女」としてある。しかし同時に石神は、そうした制度をめぐるセクシュアリティの言説の重力から逃れて非日常性を帯びた存在にこそ、「献身」に値する「崇高なるもの」を見ていた。つまり、聖女として。それはまた、東野圭吾自身が夢見た作品の鳥瞰図でもある。

石神は、花岡母娘による富樫殺害を隠蔽し、ホームレスの男を犠牲にしてまで、「聖女によって救われた『恩返し』として聖女を救う物語」を生き切ろうとしたのである。他方、湯川から事件の真相の推理を聞いた靖子は、「その重さ」（334）に押しつぶされそうになりながら、逃れられない現実へ引き戻される。その直後、事情を知らない工藤が彼女に求婚し、花岡母娘を「幸せにする」（338）という期待をこめて指輪をプレゼントする。罪意識の重圧と幸福への希望に挟まれながら、靖子は改めて、石神が警察へ出頭する前に残した最後の指示文に目を通し、その字義どおりの真意に愕然とする。「工藤邦明氏は誠実で信用できる人物だと思われます。彼と結ばれることは、貴女と美里さんが幸せになる確率を高めるでしょう。私のことはすべて忘れてください。決して罪悪感などを持ってはいけません。貴女が幸せにならなければ、私の行為はすべて無駄になるのですから」（340）。そのとき靖子は、「これほど深い愛情に、これまで出会ったことがなかった。いやそもそも、この世に存在することさえ知らなかった。石神のあの無表情の下には、常人には底知れぬほどの愛情が潜んでいたのだ」（340）と知る。言い換えれば、靖子はここでようやく、彼の「無表

情」という平面の下に隠されていたものに触れる。その瞬間、「これほど深い愛情」や「常人には底知れぬほどの愛情」を含めて、どのように言葉を並べても「常人」には語りえぬものが、それらの言葉を生んだものとして、しかしどの言葉にも認められないものとして、文面から溢れるように沸き立ってくる。石神の「献身」が成就するのは、このときである。

但し石神にとって、この至福のときは、そう長く続かなかった。苦悩の果てに、靖子が警察に出頭してきたからである。「あたしたちだけが幸せになるなんて……そんなの無理です。あたしも償います。罰を受けます。石神さんと一緒に罰を受けます。あたしに出来ることはそれだけです。あなたのために出来ることはそれだけです」(351)。そのとき石神は、顔を苦痛で歪め、両手で頭を抱えて、「うおううおううおう」と「獣の咆哮のような叫び声」をあげ始める (351)。靖子がはめることになっていた指輪に象徴された「幸せ」の輪は、忽然と消える。それと共に、その指輪にかたちを与え、そのかたちを支え続けてきた中空の穴としての石神の「献身」も。その「叫び声」は、一人の聖女への潜在的願望から発したすべての思いを孕んだ守り人の深層構造としてのブラックホールが、聖女の差し伸べた手によって光へ導かれ、闇を暴かれて、その「魂」を吐き出した瞬間の「絶望と混乱の入り交じった悲鳴」をあげながら、この世から消滅していく断末魔の声である (351)。たしかに、聖女の救済者としての石神の存在は、一つのイコンとして、これからも「凡人」の人間存在の限界と可能性を語り続けていくだろう。しかし、花岡母娘に葬り去られた富樫、ましてや石神自身が手にかけたホームレスの男に象徴される死者を思えば、たとえ湯川が「この世に無駄な歯車なんかないし、その使い道を決められるのは歯車自身だけだ」(260) と抗弁しても、はたしてそのイコンに救済はあると言えるのだろうか[3]。すべての解釈は、石神の叫び声の余韻から広がる沈黙の中にある。

注

1　http://homepage1.nifty.com/NIKAIDOU/
2　『現代思想のパフォーマンス』(83)
3　『容疑者Xの献身』が第134回直木賞を受賞したときの「選評の概要」でも、石神がホームレスの男を殺すのと引き換えに靖子を救おうとしている点に関して、複数の選考委員から異議が出ている。しかし、そのいずれもが、それを認めてなお、この作品を受賞作として推薦している。(http://homepage1.nifty.com/naokiaward/senpyo/senpyo134.htm)

引用・参考文献

市川浩『精神としての身体』(講談社、2009)
井上輝子他(編)『岩波　女性学事典』(岩波書店、2002)
内田隆三『探偵小説の社会学』(岩波書店、2001)
岡真理子『彼女の「正しい」名前とは何か　第三世界フェミニズムの思想』(青土社、2000)
笠井潔『探偵小説は「セカイ」と遭遇した』(南雲堂、2008)
木村敏『関係としての自己』(みすず書房、2005)
STUDIO VOICE BOOKS『もっと！　東野圭吾』(株式会社INFASパブリケーションズ、2010)
竹村和子『愛について　アイデンティティと欲望の政治学』(岩波書店、2002)
難波江和英、内田樹『現代思想のパフォーマンス』(光文社、2004)
橋爪大三郎『橋爪大三郎コレクションⅡ　性空間論』(勁草書房、1993)
東野圭吾『探偵ガリレオ』(文藝春秋、1998)
_____『予知夢』(文藝春秋、2000)
_____『容疑者Xの献身』(文藝春秋、2005)
_____『聖女の救済』(文藝春秋、2008)
_____『ガリレオの苦悩』(文藝春秋、2008)
_____『真夏の方程式』(文藝春秋、2011)
『ミステリマガジン』(2006年4月号 No.602)(早川書房、2006)
洋泉社MOOK『東野圭吾　全小説ガイドブック』(洋泉社、2011)
ロラン・バルト『テクストの快楽』(みすず書房、1977)
_____『零度のエクリチュール　新版』(みすず書房、2008)
鷲田清一『顔の現象学　見られることの権利』(講談社、1998)

Summary

The Suspect X's Dedication — A Trap in the Discourse of Sexuality

NABAE Kazuhide

This paper is an attempt to present a new interpretation of *The Suspect X's Dedication* by Keigo Higashino through an analysis concerning the discourse of sexuality in the text.

The initial key to critical approach to *The Suspect X's Dedication* has been set in the "controversy over the authenticity of mystery fiction" led by several writers such as Reito Nikaido, Ken Hatano, and Shigeki Omori. Major topics in the controversy vary from the definition of "authentic mystery fiction" to the validity of clues to reasoning and the technical probability of tricks. These critiques, however, fail to read *The Suspect X's Dedication* primarily as a piece of literary work. Furthermore, major critics concerned discuss man-woman relationships in the text with general heterosexual terms, and fail to differentiate their critical language from their daily language. The most "critical" point in this paper lies, as shown herein, in the unconscious liaison between the formation of human beings as sexual existence and the discourse of sexuality they use in daily life.

Seen in this light, *The Suspect X's Dedication* stands out among the other works of the Galileo Series. It is that this work not only portrays people as sexual existence but also reveals the process through which they undergo their self-formation as such and live it as social reality. Worthy of note is the fact that the scholar-detective, Manabu Yukawa, who is usually treated as genius, refers to himself as an "ordinary person" only in this case. From this fact derives a couple of points that have escaped critics' attention so far. One is the unreality of the case that has made even Yukawa a man of mediocrity, while the other is a new vision of human existence that is made available by the suspect X, Tetsuya Ishigami, as he commits an "extraordinary" crime in the guise of an "ordinary" person.

The key to these points is placed in where it can hardly be detected, viz. in the term "dedication." It is impossible, however, for the reader to account for the prominence of the work by defining the term, for it has never been used in the work except for the title. How can it be then that Ishigami has managed to live the "meaning" of "dedication" so as to exploit the possibility of human existence beyond the understanding of ordinary people? The most efficient approach to the question is to investigate the formation of heterosexual love which the other characters promote with reference to the discourse of sexuality, and to define the term "dedication" as something that cannot be found in there. This paper thus identifies the secular mode of heterosexual love as a circle, and aims to capture Ishigami's sense of "dedication" as its void.